

●奨励賞【論文概要紹介】

目指す人間像の 共有化による、よりよい 「学校ガバナンス」の実現

東京都杉並区立井荻中学校 あかおぎ ち え こ
赤荻千恵子

【実践の概要】

本研究実践は、生徒・保護者・地域・教職員で、目指す人間像「ほんものの私になる」について、共に考え、意思を伝え合い承認する過程を経ることで、学校を社会に開き、学校力を強化していく仕組みを作りたいと考えて取り組んだ5年間の実践である。

【内容与方法】

1 目指す人間像への教育活動の意義を集約

目指す人間像「ほんものの私になる」とは、一人一人がよりよい人生を生き抜く力を培うための言葉である。この言葉に、全ての教育活動の意義を集約した。その中心軸に、言語活動の活性化を据え、多様な対話を重視した。具体的には、①全校で取り組む言語活動（全校で行う意見発表会・読後交流会・ブックトーク等）の実施、②多様な人との出会いの設定（①の実施に際して作家や専門家を招聘・地域の大人とのディスカッション等）、③「ほんものの私になる」ために必要な資質・能力を各教科・領域の学習に位置付けて年間計画を立てる等で、教育課程を再構築した。

2 目指す人間像の共有化による「学校ガバナンス」への挑戦

3年を経るころから、「ほんものの私になる」

は、生徒・教職員に深く定着した。そこで、「ほんものの私になる」を共通の言葉として、よりよい「学校ガバナンス」の実現に着手した。この言葉について、生徒・保護者・地域・教職員にそれぞれ意見や感想を求め、それをフィードバックしながら、4者が、共に考え意思を反映し、共に創る学校を目指した。その手順は、①4者それぞれに対して、「ほんものの私になる」についてアンケート実施、②アンケート結果の発信・報告会の開催、③4者による合同討論会開催、④『「ほんものの私になる」について語る会』（全校生徒・保護者・地域・教職員に加え、哲学者の講師招聘）を開催して、考えを共有し承認し合う機会を繰り返し設定した。

【実践のまとめ—成果と課題—】

「ほんものの私になる」について、一人一人の生徒が自分の言葉で語ることができるようになり、よりよい生き方を考え続けている自分に誇りをもつようになった。「全ての学習が『ほんものの私になる』につながっている」と発言した生徒がいた。「学ぶことの意味」の理解や自己教育力が育ち始めている。一方、教職員の志気を高め協働に向かわせたのもこの言葉であった。また、討論会では、活発に意見が交換され、保護者・地域も教育活動に関わることで、「ほんものの私になる」の言葉を自分の成長のための言葉として捉えるようになり、学校への参画意識も高まった。

校長として、目指す人間像を軸として、学校を社会に開き、学校力を強化していく仕組みを作りたいと始めたことが、学校に関わる全ての人々の学びを通して、成長していく意思を束ねることで学校を統治するという視点へと広がった。今後も、学校に集う様々な人材の相互作用から生まれる意思を学校力として、よりよい「学校ガバナンス」を目指すことで、広い時空を共有できる厚みのある学校を目指していきたい。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

社会に参画し、他者と協働して倫理的主体を育む道徳授業の実践

山形県鶴岡市立鶴岡第一中学校 なんば じゅん
南波 純

【実践の概要】

2018年から道徳の教科化が始まる。道徳の教科化の提言の一つに「考え、議論する道徳」への転換がある。本論文は2015年度に担任した中学3年生のクラスを対象に「考え、議論する」道徳授業の実践を通して、「考え、議論する」型の道徳授業の有効性について、いわゆる「心情型」道徳授業との比較を通して、その有効性についての検証を行った。

【論文内容の紹介】

1 研究の仮説

倫理的な主体を育むための手立てとして、まず次の三つの仮説を取り入れた。

一つ目はコールバーグ理論を授業デザインに取り入れ、「道徳的・認知的葛藤経験」と「役割取得の機会」を指導過程に取り入れること。授業はオープンエンドで終わること。

二つ目は気持ちではなく「行動を問う」発問を取り入れること。

三つ目として「価値葛藤」「意思決定」を伴う場면을学習過程に位置付けること。

2 研究の視点

前述の仮説をさらに深めるために、

- ①2学期全体の道徳授業テーマを「生命」として現実社会の倫理的課題を設定した。

- ②題材として、「臓器移植」や「がん告知」などの社会的に議論のあるテーマに設定した。

- ③他者と協働して倫理的な課題を追求するために、「行動を問う発問」を設定した。

- ④社会に参画するための手立てとして、ニュース映像など「ICT」を教材提示に活用し現実に行き起きている社会問題の事実を、より鮮明に生徒に提示することができると考えた。

2学期はこうした仮説のもとに授業実践を行ったが、「心情型」といわれる議論を伴わないスタイルの授業も行い、「考え、議論する」型と比較することで有効性の検証を試みた。

検証方法として、2学期最後の道徳の授業においてクラスの生徒全員にアンケート調査を行い、その結果について分析した。

3 研究のまとめ

12月に生徒に実施したアンケートの結果として、「がん告知」や「臓器移植」など価値葛藤・意思決定を伴う「考え、議論する」型道徳授業に対する評価が、「心情型」の授業スタイルよりすべて上回った。また、1・2年時の道徳の授業と、3年2学期のテーマ「生命」の授業のどちらが有意義であったかについても84%の生徒が、3年次の道徳授業が有意義であったと回答した。

このように「考え、議論する」型の道徳授業は、より多くの生徒に評価されるという結果になった。「心情型」の評価が全体的に低かった要因として実施時期の違いがあげられる。

しかし「考え、議論する」型が生徒に明確に支持された背景として、これまでの「心情型」の授業が旧来の学校文化の象徴として教師側に支持されてきた傾向があるのに対して、授業のプロセスを重視する道徳の「アクティブ・ラーニング型授業」が、学校や教育の新たな文化・スタイルとして生徒たちに受け入れられ、評価されたのではないかと考えられる。